

河内長野市第6次総合計画 第1回審議会

河内長野市の現状とターニングポイント

～転換期にある河内長野市の人口の動きを中心に～

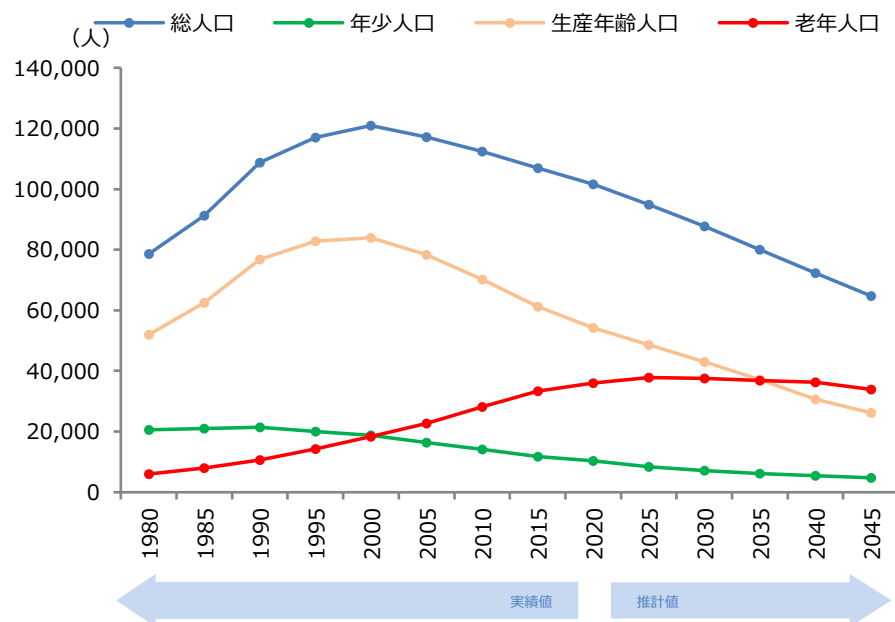
令和6年10月5日(土)

転換期にある河内長野の人口動態

- 人口減少・少子高齢化は全国と同様に進行しているが、転出超過は縮小し、人口減少の主因は死亡が出生を上回る自然減少に移行。

河内長野市の人口の推移と将来推計(社人研)

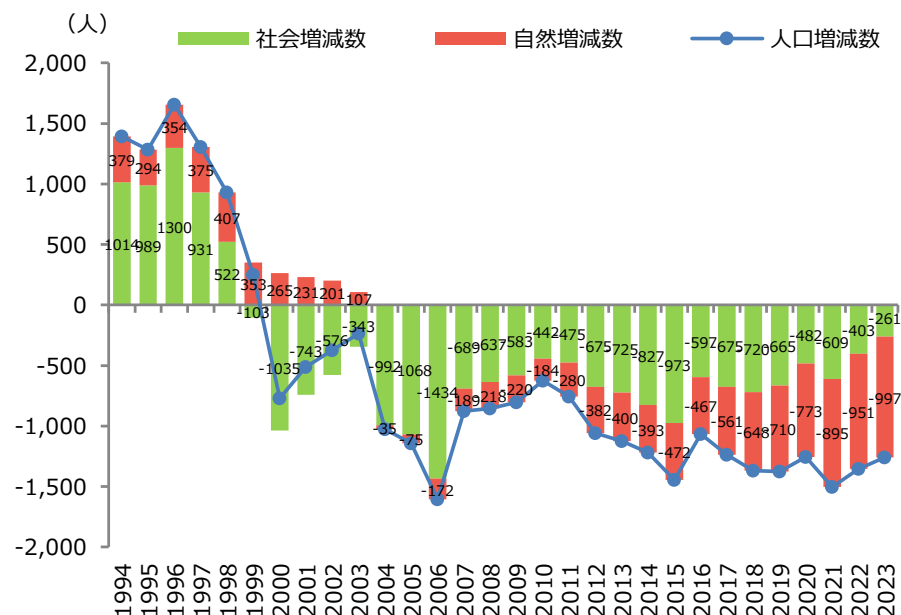
全国と同様に人口減少・少子高齢化が進行



- 総人口は2000年をピークに減少
- 高齢化が進行するが、高齢者の数そのものは頭打ちになる

社会増減と自然増減の推移

社会減少は縮小し、減少の主因は自然減に



- 1996年には1300人の転入超過を記録したが、2006年には1400人転出超過
- 近年は社会減少は縮小し、2023年は1999年以来の少なさに。

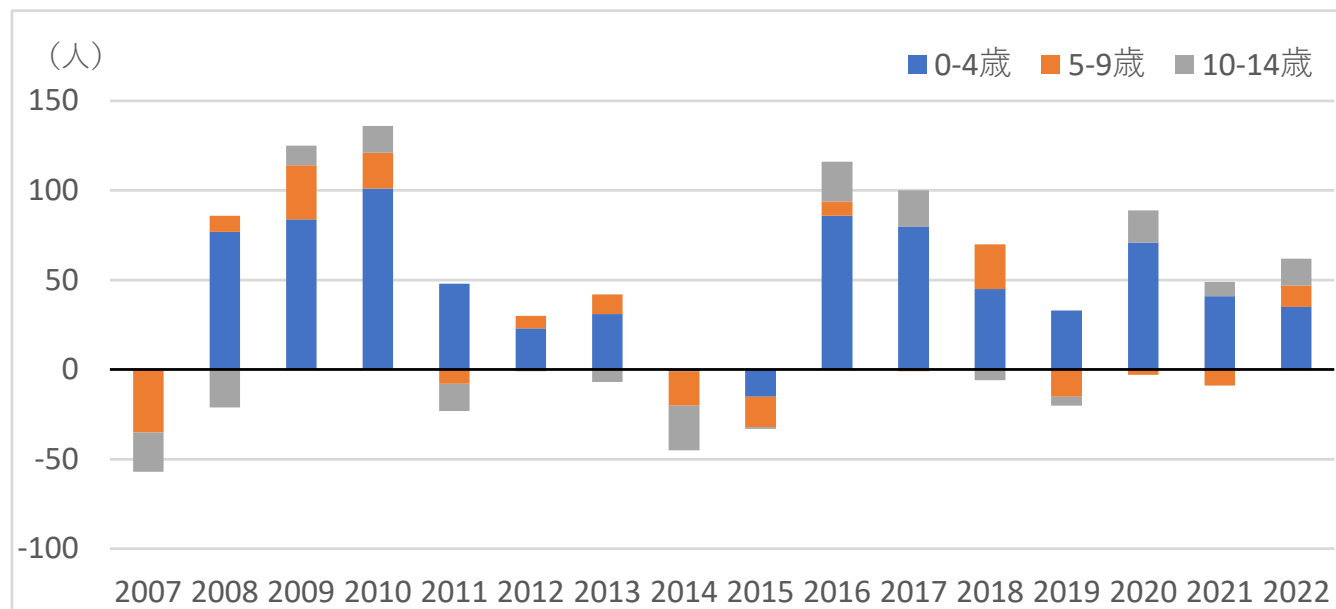
転換期にある河内長野の人口動態

■ 高齢化が進む一方で、住民が若返る兆しもある

- ファミリー層の転入が進む中で、15歳未満の年少人口は2016年以降7年連続で転入超過

年少人口の社会増減

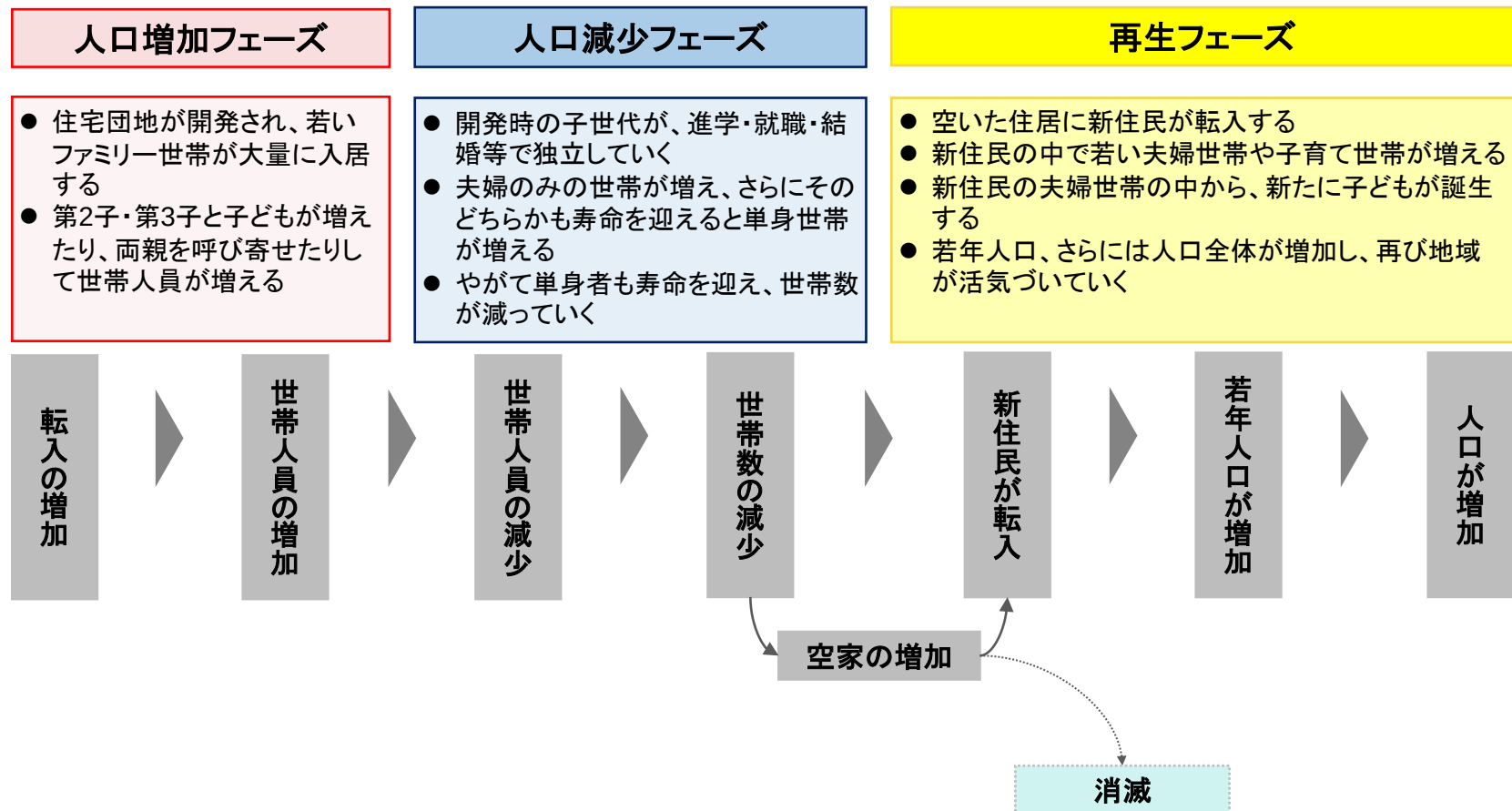
子どもだけ見れば、7年連続で転入超過



住宅団地のライフサイクル

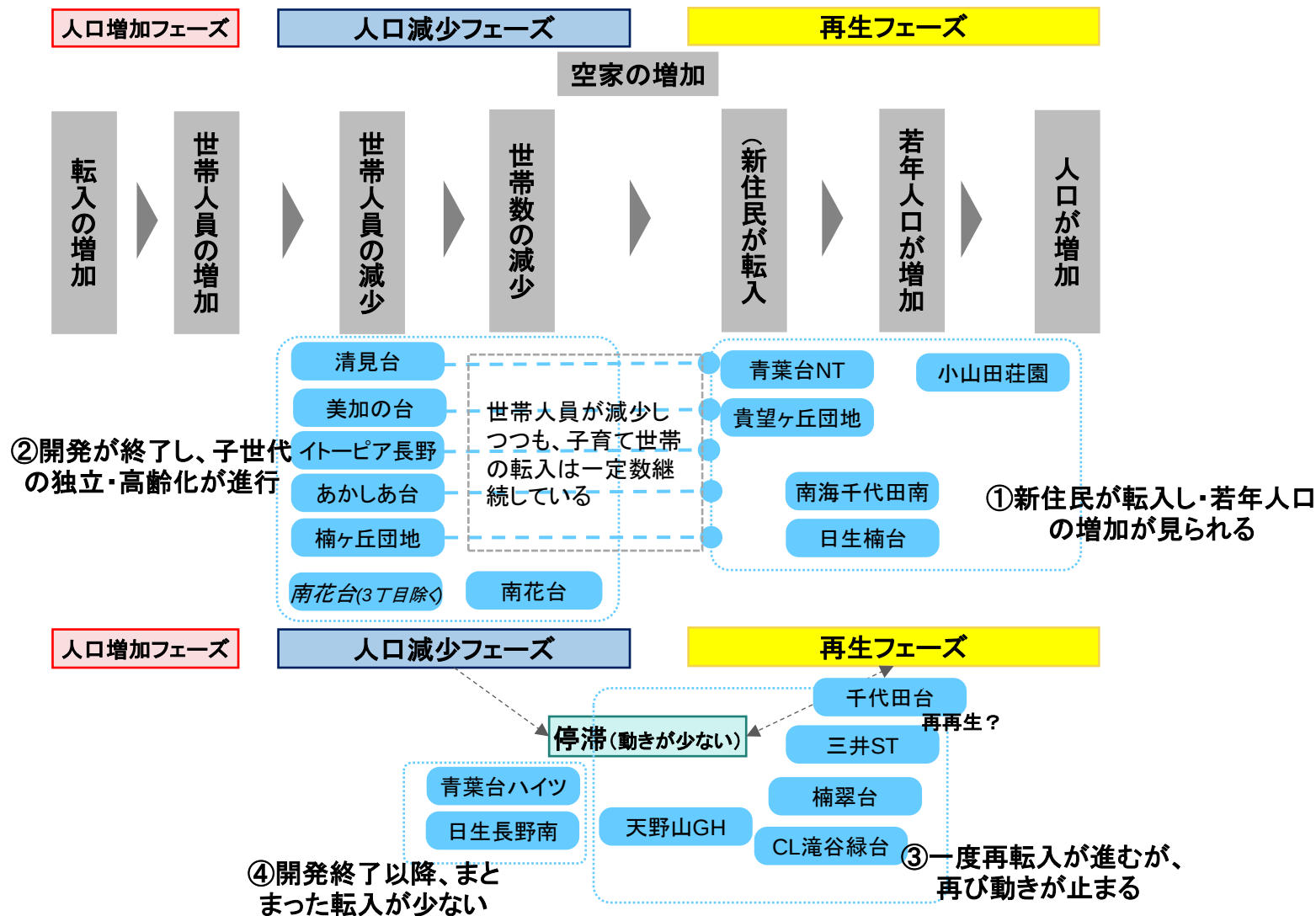
人口減少状態が維持・増加へと反転していく萌芽を見つける

- 昭和50年前後を中心に、民間主導により郊外型の住宅団地が多く整備され、人口が急増した河内長野市
- 現在でも市全体の人口の半数弱が住宅団地のエリアに住み、転入・転出の4割もこのエリアで発生している
- 住宅団地のライフサイクルを的確に捉えることで、人口減少・少子高齢化の速度を緩和する次の打ち手を考える



住宅団地ごとのステージ

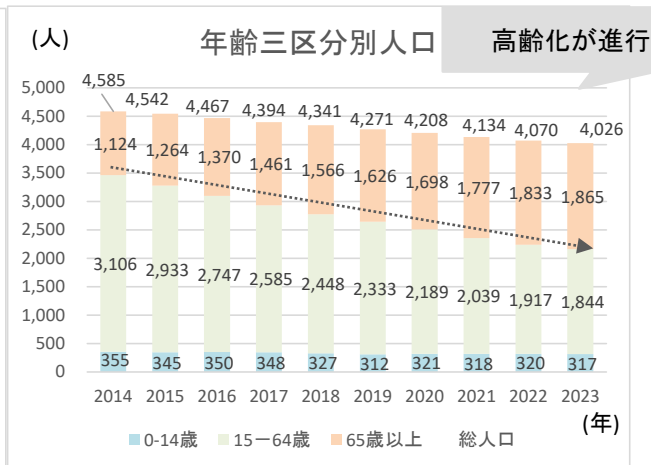
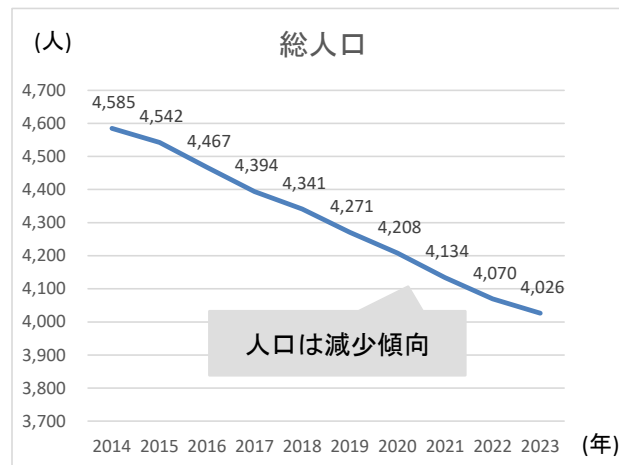
開発時期やその後の転出入の波によって、置かれている状況が異なる。



①開発が終了し、子世代の独立・親世代の高齢化が進行している地域(清見台)

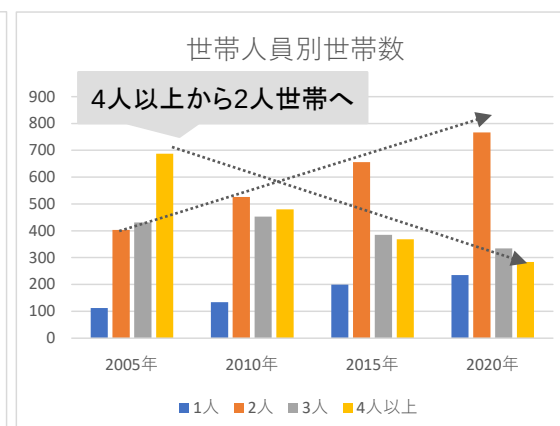
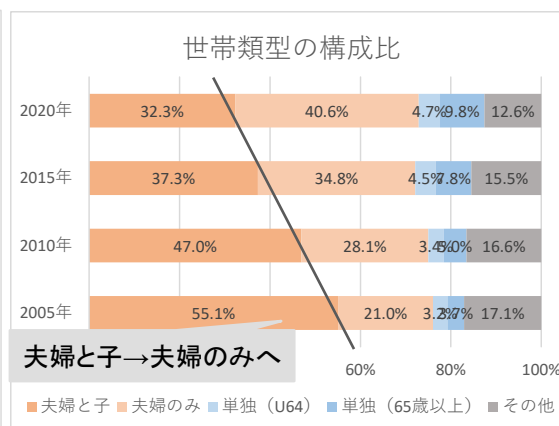
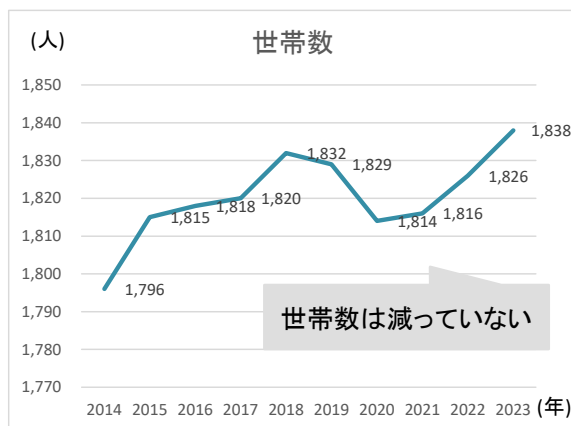
■ 人口状態、動態の総論

- 人口は減少し、高齢化が進行している。



■ 世帯関係(増加→減少フェーズ)

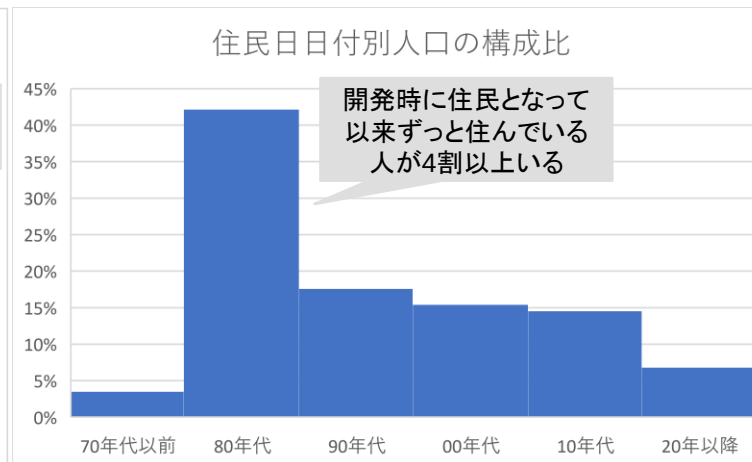
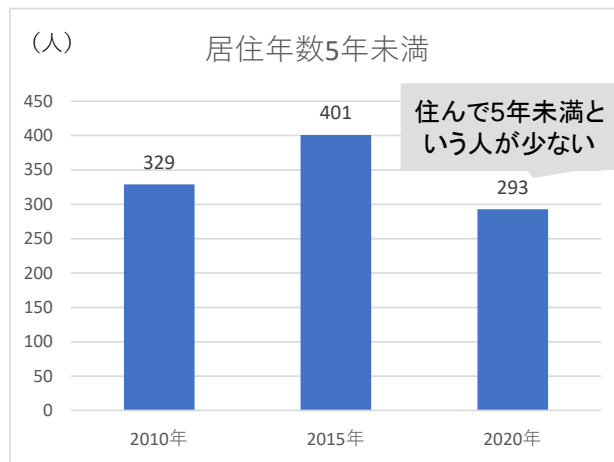
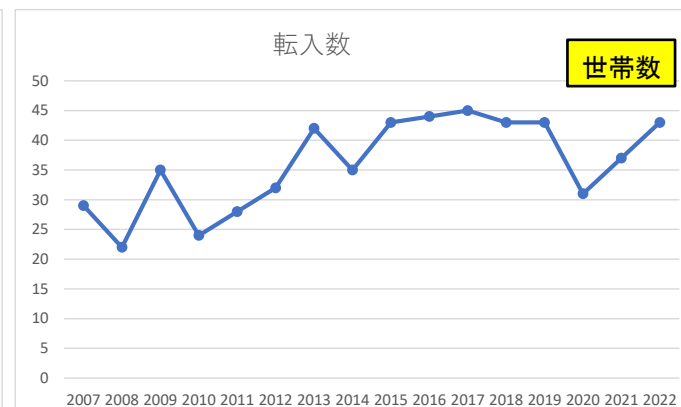
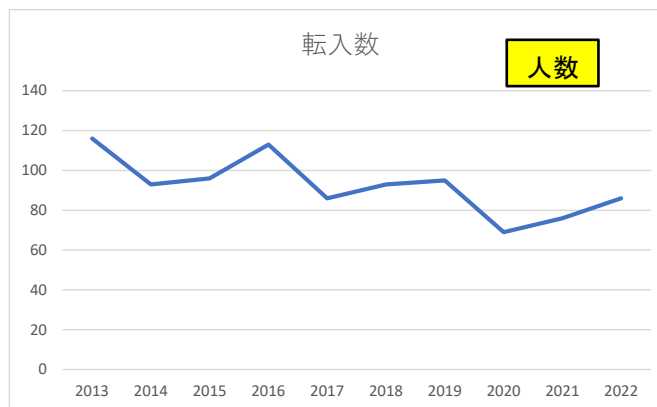
- 世帯数は減っていないが、開発時に大量に入居した際の子世代が成人し、進学、就職、結婚等で家を出ていると考えられる。
- そのため、世帯類型も「夫婦と子」中心から「夫婦のみ」になり、世帯当たりの人数も「4人以上」が最多だったのが、「2人」が最多となる。



①開発が終了し、子世代の独立・親世代の高齢化が進行している地域(清見台)

■ 居住年数・転入(再生フェーズ)

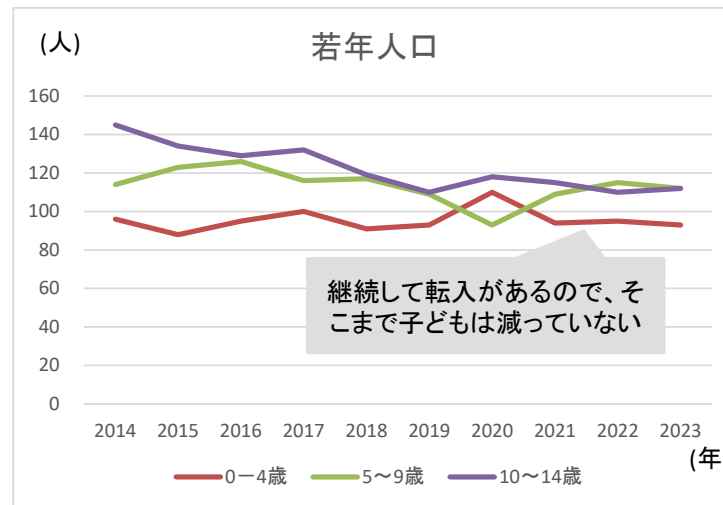
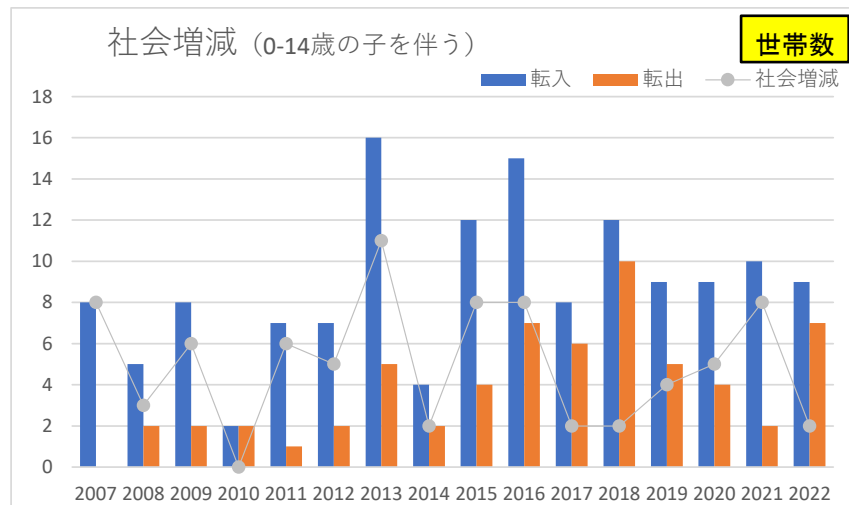
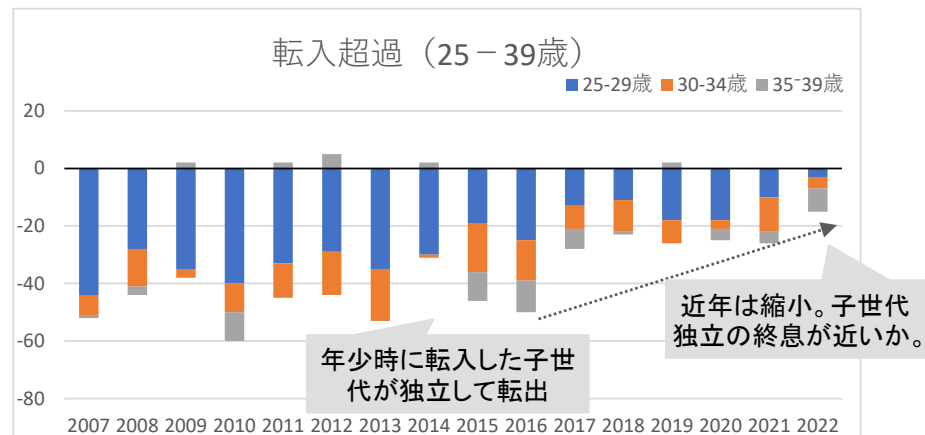
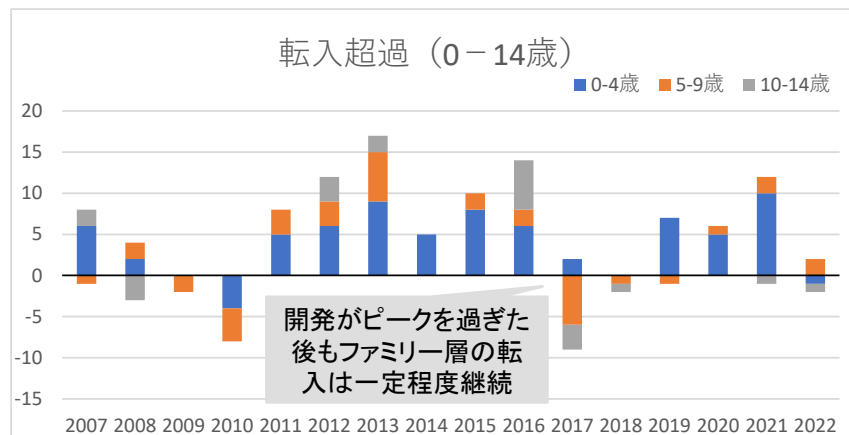
- 開発が終わった後も、転入そのものがなくなるわけではない。ただ、人数としては微減傾向。
- 世帯数の転入は減っていないため、転入者の世帯当たり人員も少なくなっていると考えられる。(4人ではなく3人など)
- 居住年数5年未満、という人が少なく、開発が進んだ80年代以来ずっと住んでいる、という人が4割以上いる。



①開発が終了し、子世代の独立・親世代の高齢化が進行している地域(清見台)

■ 転入状況詳細(再生フェーズ)

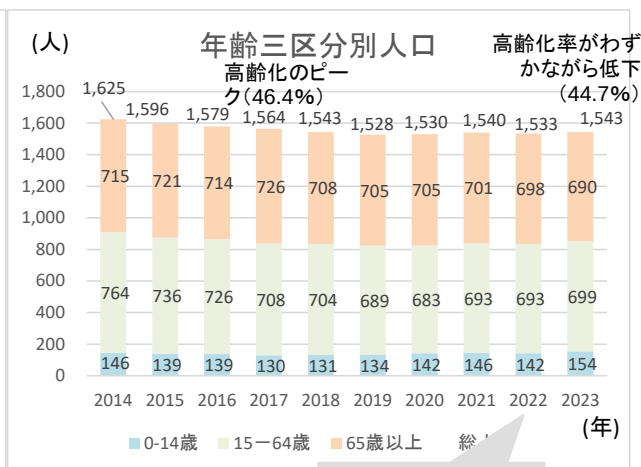
- 0 - 14歳のこどもやその世代の子を伴った世帯については、転入超過の年が多く、子どもの数はそれほど減っていない。
- 20代後半から30代において、「年少時に転入した子世代の成長・独立による転出」>「小さな子連れした親世代の転入」という状態のため、転出超過。ただし、近年終息傾向。



②新住民が転入し・若年人口の増加が見られる地域(荘園町)

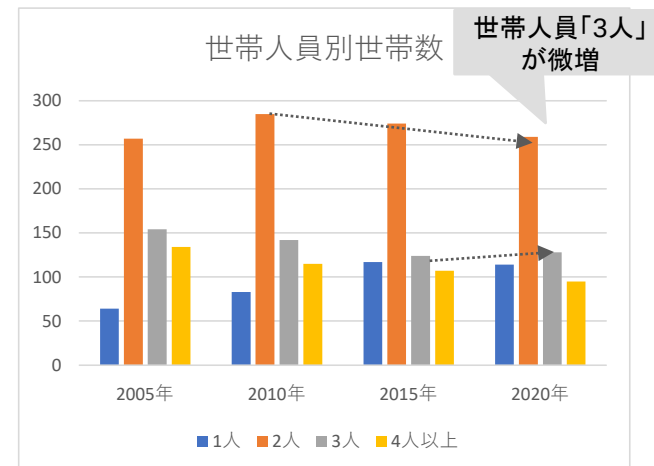
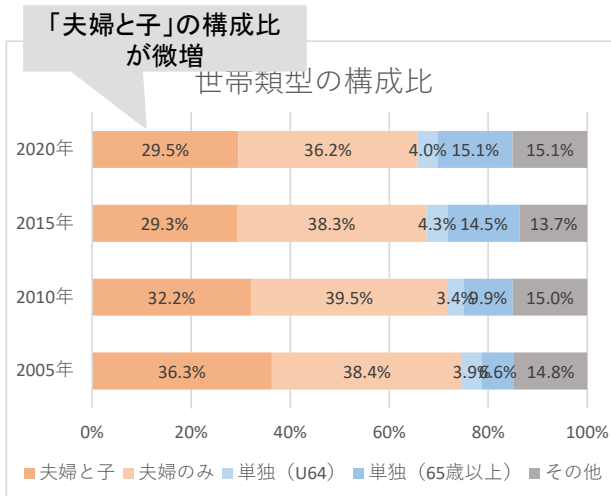
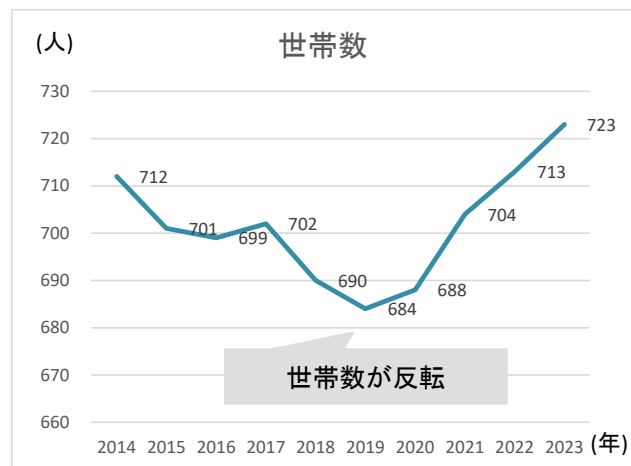
■ 人口状態、動態の総論

- 人口の減少に歯止めがかかり、高齢化についてもピークアウトしている。(開発初期から住まれている方が寿命を迎えている)



■ 世帯関係(減少→再生フェーズ)

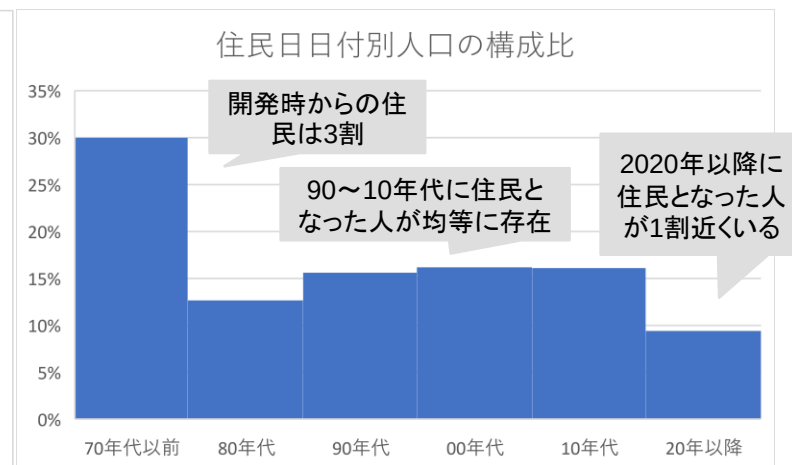
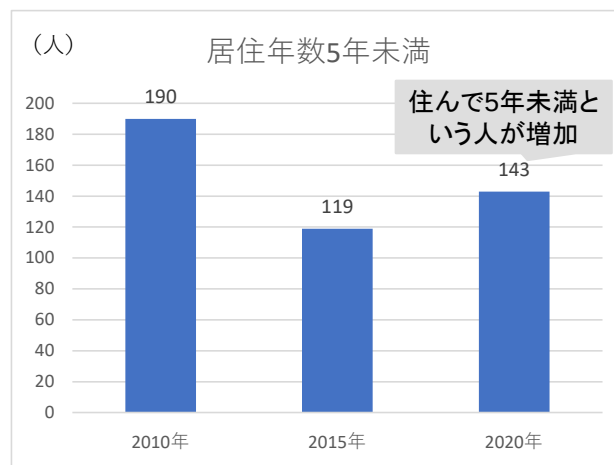
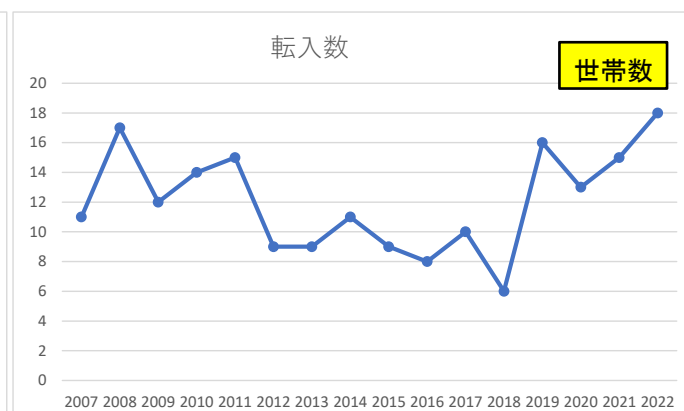
- 世帯数が減少していたところが反転し、「夫婦と子」からなる世帯の構成比の比率が微増している。
- 世帯人員「3人」が下げ止まり、「夫婦のみ」という世帯がピークアウトしている。



②新住民が転入し・若年人口の増加が見られる地域(荘園町)

■ 居住年数・転入(再生フェーズ)

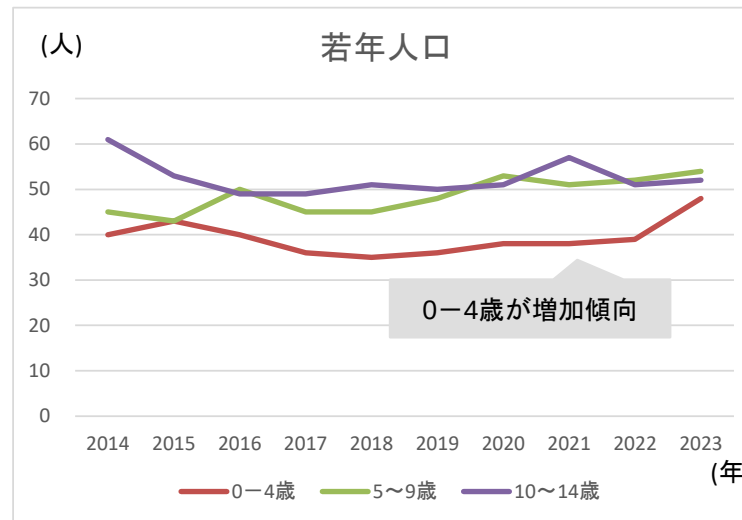
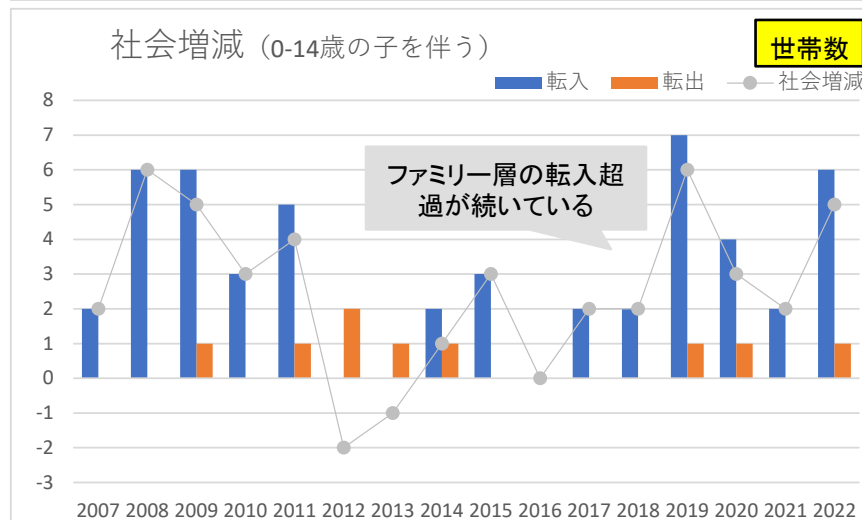
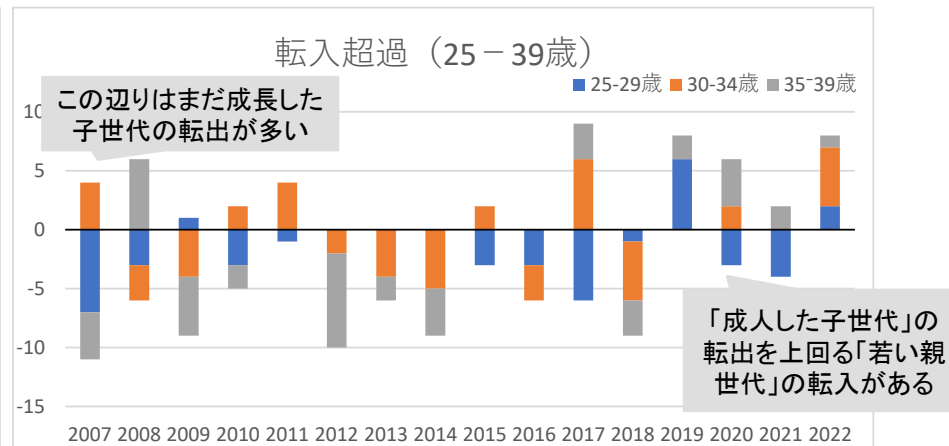
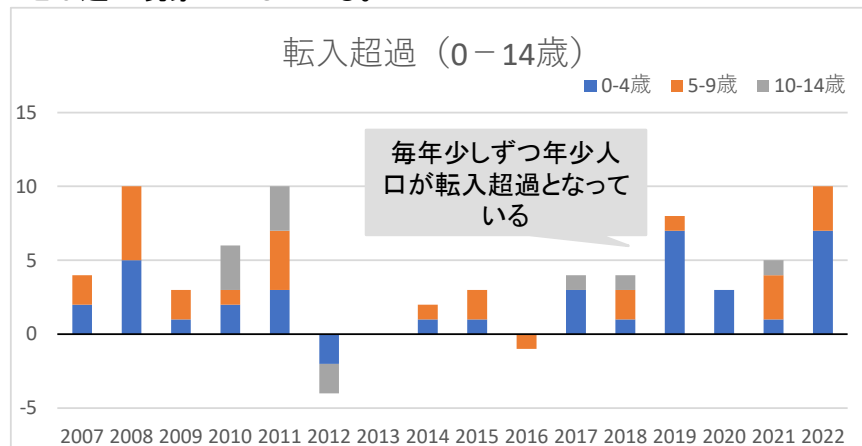
- 人数ベースで転入数が増加
- 住んで5年以内という住民が増加
- 開発当時の住民も3割いるが、90年以降ある程度新住民が入ってきたと思われる。
- 2020年以降に住民になった人が、2023年10月時点で1割近くもいる。



②新住民が転入し・若年人口の増加が見られる地域(荘園町)

■ 転入状況詳細(再生フェーズ)

- 毎年少しずつ年少人口が転入超過となっており、0-14歳の子を伴うファミリー層が6年にわたって転入超過が続いている。
- 25-39歳も転入超過になる年が増えており、「年少時に転入した子世代の成長・独立による転出」<「小さな子を連れた親世代の転入」という清見台とは逆の現象が生じている。



人口推計について

第6次総合計画における人口推計について

ターニングポイントを捉えた戦略的な将来人口の設定

■ 考え方

- 河内長野市の各所において、人口の動きがターニングポイントを迎えていることを踏まえた推計を実施する。
- 開発から時間が経ち、住民が入れ替わりつつある住宅団地では、若い世代が増えるなど、再生の萌芽が見られる。
- 再生の萌芽が見られる地域においては、開発当初から在住している人口のシェアの推移など、一定の規則性が見られる。
- また、再生が進む地域においては、若い世代の転入が進み、出生率が上昇することも考えられる。
- このような動向を踏まえ、今後再生過程に入っていく地区がどれくらいあるかを見据えながら、独自の推計を行う。

